

博物館を活用した研修プログラムの開発

—長野県立歴史館での実践を例に—

小山 茂喜*

1. 問題の所在

平成元年度版小学校学習指導要領「社会」の第3の1で、博物館や郷土資料館等の活用を図ることが示されて以来、博物館等を活用した授業実践のあり方が模索されている¹⁾。

学校教育も、情報教育の進展に伴いネットワーク等活用した学習が展開されるようになり、教室内で完結する学習から、教室を越えた学習へと新たな展開が提案されてきているが、まだ博物館等の外部機関と連動した学習そのものは、博物館における教師用ガイドブックの作成率が6.1%、小・中学生用のガイドブックの作成率が、14.4%という数字が物語っているように、それほど盛んとはいえない状況である。また、社会科学習との関連では、博物館の約57%が歴史博物館(博物館と博物館類似施設を合わせて)という実態からみると、地域学習や歴史学習等での活用の充実が期待されているところである。博物館側からの学校教育へのアプローチをみると、平成2年の社会教育審議会の中間報告「博物館の整備・運営の在り方」において、「学校教育との関係の緊密化」が示されたことから、連携のあり方を模索しながら、社会見学等における博物館側の対応や出前講座の充実が図られてきている²⁾。しかし川越市立博物館などの一部の事例³⁾を除くと、博物館の活用については多くの場合見学のための学習の域を出ることが少なくなく、さらに見学も学芸員が主で教師が従という形態が多い。

そこで、教師が主体的に博物館等を活用し、教室での学習を有機的にかつ継続的に展開する授業設計の在り方を学ぶ講習プログラムの開発を試みた。

特に、博物館側からは、これまでの静的な展示でかつ来館してもらうことを前提として展開されてきた博物館における教育普及活動から、「話す」「聞く」「触る」「つくる」といった動的かつ体験型の展示や活動が提案されるようになってきていることと⁴⁾、平成20年度版学習指導要領総則の「第4指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」2の(1)で示された「児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動」の充実という観点から、子どもたちが何を学んだのかを子どもたち自身で表現させる学習の評価を教師が意識しての授業設計のあり方について研修することに重点を置いた。

* 信州大学 全学教育機構 教職教育部 教授

2. 講習の概要

平成 23 年 11 月 6 日（日）に長野県立歴史館を会場に、信州大学主催の免許状更新講習講座「歴史館で教材開発」において実施した。

受講者は、小学校教員 14 名、中学校教員 7 名、高等学校教員 11 名、特別支援学校教員 5 名、その他 6 名の計 43 名であった。

講習内容としては、歴史館という博物館が持つ機能を理解し、社会見学を実施する場合の学習展開を想定し、子どもたちの学習成果を評価するための課題をどのように作成したらよいかを考えることを目的とし、表 1 のような日程を計画し、大学教員 1 名と歴史館学芸員 4 名で担当した。

表 1 講座の内容

コマ	内 容	備 考	担 当
1	地域教材の開発と博物館等の活用について (博物館が持つ教育力について学ぶ)	6 0 分	大学教員
2	博物館の教育資源についての解説 ・ 歴史館の概要 ・ 所蔵資料についての解説 ・ 常設展示についての解説	9 0 分	学芸員
3	博物館内での調査 ・ テーマの設定 ・ グループの組織 ・ テーマに沿った簡単な調査	6 0 分 各自の目的に応じて、博物館の資料を調査する	大学教員 学芸員
4 ～ 5	学習内容に応じたの演習 展示見学の際の課題作成 ・ 歴史館見学を想定し、事前・事後指導も含めた学習のための課題を作成する。	1 2 0 分 ・ 事前指導 ・ 博物館における学習活動の課題設定 ・ 見学終了後のまとめの視点の設定 ※地域素材を活用するという視点で、展示資料だけでなく収蔵庫の資料も含めて考える。	大学教員 学芸員
6	○成果の評価	3 0 分 作成した計画を発表する	大学教員

3. 講習の実際

(1) 1 限目…地域教材の開発と博物館等の活用について（講義 60 分）

1 限目は、博物館等を活用した学習のあり方について、博物館の持つ教育力や教育資源に視点を当てながら、大学教員が講義を行った。

特に、本講義では博物館に子どもたちが来て学習することを想定して、どのような指導・支援を行ったらよいのか、どのような補助教材を作成したらよいのかについて、テキストを使って解説した。



(ア) 講義内容

①研修の趣旨と内容の概要について

研修を始めるにあたって、以下の4点を中心に解説した。

博物館は社会科の授業には大変有効な教育施設であり、教育方法を多様化するために活用したい施設であること。

近年、学校との連携も活発に進める施設が増大しているが、博物館はあくまで、それ自体の考え方で行う生涯学習施設であり、学校の附属物や補完施設として学校における社会科授業のためにある施設ではないこと。

学校教育との大きな違いは、博物館での教育機能は、ひとつの目標への到達度に価値をおかないということを信条としていることであること⁵⁾。

本講習は、博物館の特性と教育的資源について理解し、社会科授業の教育方法のひとつとして有効に利用するにはどうしたらよいかという視点での授業設計演習であること。

②博物館の教育力について

i 博物館の特徴・利点

教育という視点から博物館の特徴・利点について、以下の3点に整理し解説した。

第1に、実物教育による“さわる”“嗅ぐ”“感じる”に基づく、具体から抽象への教育に有効であること。

博物館の最大の特徴は実物資料の収集・保管・活用であり、博物館における社会認識教育の特徴は、モノによる教育であること。

学校教育においても、もちろんモノによる教育はある程度可能であるが、博物館利用の比ではないこと。

第2に、子どもが既に持っている知識を組み立てる力の育成を図る教育に有効であること。

第3に、多様な学習の場の提供に有効です。学校では得づらい多様な教育方法満載の場であること。

ii 博物館のもつ教育機能

博物館の持つ教育機能について、博物館そのものが展開している教育活動と、教員が博物館の活用に自らかかわることで、教員のスキルアップにつながる研修としての機能について以下の解説を行った。

日本の博物館、特に社会・歴史系博物館においては、諸外国に比べて、「指導者研修プログラムの実施」⁶⁾は、あまり活発とはいえず、教育活動の中心は「展示による来館者への学習機会の提供」「講座・教室、体験等のイベントによる学習機会の提供」である。

「展示による来館者への学習機会の提供」を利用する場合、展示に込められた対象事象の理解の構造を把握することが重要で、展示の内容や順序は、ひとつのカリキュラムであり、授業構成といえる。

「展示による来館者への学習機会の提供」は、「講座・教室、体験等のイベントによる学習機会の提供」がその場限りで消えていくのに対して、物理的な永続性があり、学習者自身のペースで何度でもわかるまで繰り返し学ぶことが可能であるという利点を持つ。

他方、講師によって探究の筋道が示される講座や講演と異なり、「展示による来館者への学習機会の提供」では、何をどのように見て、それによって何をわかるのかを見学者自身が明確に意識しなければその効果は激減するため、それらを見学者に明確に伝えることが重要になる。

それには、展示資料の選択・配置・展示方法自体が大きな働きをするが、さらにその補助として、多くの社会・歴史系博物館の展示において、1980年代以降解説シート・セルフガイド⁷⁾やガイドブックなどが用意されることが多くなった。中でも、セルフガイドは、単なる情報伝達を主たる目的とする解説とは異なり、問いかけなどによって見学者の興味・関心を喚起し、能動的な観察や見学を促すことを目的としている。

通常、展示の写真とその解説が掲載されているガイドブックは有料で、順路に従って見学を終えた出口付近で初めて出会うことが多いため、展示見学時に展示についての理解を深めるために用いることよりも、むしろ、展示見学を終えて見学の記念として購入されることを意図して制作されていると思われるものが多い。

他方、解説シートやセルフガイドはほとんどが無料で、展示の入り口あるいは展示の所要所に置かれ、見学者がそれを読みながら展示を見学することが意図されている。また、ワークシートは解説シートとは異なり、展示の理解を深めることを目的としていることが多く、見学者の興味関心を促すため、それに従って何らかの作業をする形式がとられている。

るが、実際にはクイズ形式のものが多く、展示物それ自体についての一問一答式解説にとどまっている場合が多いのが現状である。

博物館の教育機能で社会系諸教科に有益なのは、直接子どもに及ぶものだけではなく、博物館利用による教師自身の教授能力の向上も重要な機能である。書庫の利用やバックヤードツアー等博物館が持つ調査・研究機能に触れることは、教材研究能力が向上するとともに、授業構成に対して大きな示唆を得ることができる。

iii 社会・歴史系博物館における教育活動とその利用における問題点⁸⁾

博物館と学校教育との連携にかかわる課題について、以下の解説を行った。

学校週五日制による学校外活動時間の増大、総合的学習の時間や体験学習の充実、生涯学習への接続という点等から博物館の教育活動に対する期待は大きくなっている。

他方、博物館側も長引く経済不況で入館者が伸び悩む中、入館者数や利用率、収益といった数字による数値化できる評価が予算の査定や存立に反映されることから、小・中・高校生への教育支援に目を向けるようになってきている⁹⁾。そこには、学校団体を積極的に受け入れることにより、当面の入館者増を図るとともに、将来の安定的利用者を養成することにもなるという事情が推察され、博物館の設立意義である資料の調査・収集・保存・展示に加えて、教育活動の充実が図られるようになってきている。しかし、博物館の教育活動と学校教育における博物館利用には、いくつかの問題点が見られる。

第1の問題点は、学校との連携が十分になされておらず、教師が子どもを博物館に連れて行けばそれでよいと考えていると思われる利用が多いことである。

授業の補完的役割程度にしか位置づいていないことが多く、学校が博物館に体系的な学習機会の提供を依頼する場合には、「日本の博物館総合調査研究報告書」の博物館の対応にもみられるように館内での学芸員による解説が主で、博物館への丸投げ状態になっていることが多いことである。つまり、“学校から生徒を連れてきて、送り込みっぱなし”“博物館へ連れて行けば、学芸員が何とかしてくれる”という状況がみられることである。

第2の問題点は、実物学習や体験学習が社会認識に位置づかないことが多いということである。

博物館における社会認識教育の特徴は、モノによる教育であるが、実物学習や体験学習の多くは、実物を見ること・触ることや活動すること自体のおもしろさの追究にとどまっていることが多いと考えられる。

日本の社会・歴史系博物館における体験で比較的多く見られるものは、歴史的なものの制作体験（土器作り、土偶作り、勾玉作り、わら草履作り、提灯作り、凧作り、竹細工、紙漉など）、昔の生活体験（火おこし、古代人の食事、十二単着用、昔の子どもの遊び、各時代の灯りや生活道具、昔の農機具に触れるなど）、各地の生活体験（住居、衣服、食事、生活道具、生産活動などの体験）、伝統的な行事や芸能の体験（郷土の祭り体験、墨

絵作成、古代の音色、伝統工芸品作りなど）である¹⁰⁾。

それらの多くは、展示との関わりが明確にされないまま、集客行事的に実施されていることである。たとえば、十二単を着用して記念写真を撮る、メンコやけん玉で遊んでみる、古代人のレシピを使った料理教室などイベント性が強く、参加したことによってその時代の社会をわかろうという意識が参加者にはあまり見られない。

また、土器づくり体験の場合、時間的ならびに施設の制約もあり、土器づくりの一部分を体験するだけで、その結果、子どもたちは工作としての楽しみをそこに見出し喜々として活動はするが、土器自体についても、またそれを通して縄文時代についてもわかることはほとんどないというのが実態である。

第3の問題点は、博物館が持つ調査・研究機能が、教育活動に充分盛り込まれていないことである。

博物館の機能として学術研究の側面が高く、閉鎖性の比較的強い大学や研究所等の研究施設と大きく異なり、一般の市民が社会や歴史に関する科学的な調査・研究を体験したり、その方法を学べる貴重な場であるが、学芸員とともに調査をしたり、収集された資料の分析に参加したりする機会はほとんど設定されていない。

来館者が科学的な調査・研究の機会を得ることができるよう、展示に至るまでに学芸員が行った調査・研究をそのままあとづけることを可能にする豊富な専門書や調査資料自体の報告書など、博物館の書庫に眠っているはずの情報の提供をすることが重要になってくる。

また、博物館の調査・研究機能を習得するためには、博物館の裏側すなわち展示の背景にある学芸員の調査・研究活動を紹介するバックヤード・ツアーの充実も有効であるが、江戸東京博物館など比較的充実したバックヤード・ツアーを実施しているところもあるが、それらはまだまだ少数である。

第4の問題点として、美術系、自然・科学系に比べて社会・歴史系における教育活動が不活発であることである。

美術系や自然・科学系の博物館においては、子どもを対象とした教育活動は比較的早くから盛んである。特に自然・科学系博物館は対象の中心を子どもにして設立されたものも多く、また昨今の子どもの科学離れという危機感もあり、子どもたちが実際に実験を体験するコーナーを初めとする子ども向けプログラムの開発がなされるとともに、学芸員が学校に出向くことも行われている。

③博物館展示の教育機能を授業の一部として有効に利用しよう

i 博物館展示がもつ教育機能

教師が主になって展示を活用するための視点について、以下の内容で解説を行った。

博物館の展示にはそれ自体に論理があり、何の準備もせずに、子どもを博物館に投げ込

んでおくだけでは、子どもは展示から博物館が意図する社会認識なり自然認識を学ぶことになる。つまり、教師の意図に沿って博物館を利用するのではなく、博物館の意図に沿った教育が行われることになり、そこには教師の主体性がなくなってしまうことになる。

そこで、まず博物館の論理に基づく社会認識や自然認識の分析を以下のような視点で行うことが必要となる。

- ・何が展示されているか
- ・どのような順序、配置で展示されているか
- ・展示物にはどのような解説が附されているか
- ・用意されているパンフレット等には何が書かれているか

たとえば、歴史博物館の場合、上の視点に加えて、もう一步踏み込んで展示を以下の視点で観察することで、博物館側の展示の意図が明確になる。

- ・時間の意識
時間的前後関係や歴史的重みを考えてみよう。
- ・変遷の意識
歴史的事象の成立→発展→崩壊という移り変わりについて考えてみよう。
- ・因果の意識
事象と事象との間に存在する原因と結果（因果関係）について考えてみよう。
- ・未来を意識
歴史的事実から未来の人間の生き方について考えてみよう。

これらの分析により、次のようなことを判断する必要がある。

- ・博物館によって敷かれたレールに乗ることで、子どもはどのように対象事象を認識するのか
- ・授業の一部もしくは補完を担うものとしてふさわしいか

ii 博物館利用のための準備

教師が主体的に授業設計し実践するために、どのように歴史館の展示を授業に位置づけるのかをオリジナルテキストの作成という視点で解説した。

歴史館が持つ教育資源は展示されているものだけでないので、見学以外の方法でも歴史館を活用することも考慮し、見学を活用した学習課題の設定と、それに合わせたオリジナ

ル・テキストを作成することが、有効な手立てになる。

一般に、博物館には展示に関するガイドブック、解説シート、ワークシートなどが用意されていることが多く、子どもたちはそれらを片手に定められた順序で展示物を順番に見学していくことが多い。

解説シートなどは、いずれも来館者が眼前の展示をより深く理解することには有効に働く場合が多いが、そもそもその博物館で学ぶという動機付け・問題意識の喚起・興味付けには力不足であり、その博物館を利用することによって形成できる社会認識や自然認識の体系化という点でも弱いといえる。

「展示による来館者への学習機会の提供」においてその意図を十分に達成するためには、来館前の学習、博物館における学習、見学終了後の学習の体系化を可能にし、しかも単なる個々の展示解説にとどまらないテキストを用意することが必要となる。

[長野県立歴史館のワークシートの例]

黒か谷山の幸

約 6000 年前の縄文時代前期には、現在と同じような樹木が育っていた。東日本でどんぐりやヤマナリなど、実をつける木々の森（落葉広葉樹林・らくようこうようじゅりん）が広がっていました。

木の実やきのこ、ヤマノイモなど植物の食料採取を中心にして、秋にはサケ漁、冬には鳥や獣（けもの）の狩猟などをして暮らしていました。

竪穴住居の内には、クマ、シカ、カモシカのも皮が敷かれています。伊の中には火にかけた土器の中でやまぐりがゆでられています。夕食の準備をしているのでしょうか。伊の脇の浅い鉢にはどんぐり団子にイノシシの肉やゼンマイ・ミツバなどの煮物（にもの）が盛られています。

伊のまわりには、どんぐりなどを割る台石とたたき石、それらを杵にする石皿とすり石などがあります。伊の上の火棚（ひだな）にはへびの干物（ひもの）もあります。

住周辺には、狩に使う弓と矢、シカの角で作った釣り針、天蓋（てんさん）の糸から造った釣り糸のついた釣竿（つりざお）、木を切るときに使う磨製石斧（ませいせきぶ）、家の修繕などに使うフジ、アケビ、ヤマブドウのつるやそれらで造られた籠（かご）などの日常生活の道具があります。

屋根を支える梁（はり）にはノウサギやキジがつるされています。さまざまな食料や道具から、縄文人の豊かな生活を実感できます。

探してみよう！

左の写真①～⑤は室内にある道具のほかに、住居のまわりで見つけることができる動物や木の実に、どこにあるのか探してみませんか。

写真の名称（①から順に）

①うるし塗りのくし ②ヘアピン
③柄についた打製石斧（土曜具）
④又木（またぎ） ⑤どんぐり団子
⑥くん製されたイワナとヤマメ

**ここにあって！
□をチェック！**

ほかにもイロイロあるから、お気に入りを見つけてみよう。



iii 館内展示を見学する際のポイント¹¹⁾

- 2 コマ目行われる「館内見学」にあたっての視点について、以下の内容で解説した。
- ・展示室の概要をつかみ展示場所に行き、展示資料を見る。

- ・展示資料の名前を知る。
- ・展示資料がつくられた年代を知る。
- ・展示資料に関する解説を読む。
- ・展示資料をよく観察する。
- ・近くに置いてある関係のありそうなものを見る。

さらに、授業設計という視点では、以下の点についてくわしく見ると、どのような観点で学習に取り入れることができるかが見えてくると思われる。

- ・ 何に使ったのか考える。
- ・ どのように使ったのか考える。
- ・ 誰が（どんな人が） つくったのか考える。
- ・ 何のためにつくったのか考える。
- ・ 人間のくらしに与えた影響と人間の知恵について考える。
- ・ 今の時代からの時間的経過を考える。
- ・ 同じ時代とのつながりを考える。
- ・ 他の時代への移り変わりを考える。
- ・ 当時の人間のくらしの様子を想起する。
- ・ 現在の人間のくらしと対比し、未来の人間の生き方について考える。

④授業の論理で博物館を利用できるようにしよう

i 博物館の利用法 ¹²⁾

授業の中にどのように博物館での学習を位置づけることができるか以下の例を示し解説した。

【課題発見型】（導入）

博物館→学習課題→調査活動→まとめ

【問題解決型】（展開）

学習課題→調査活動→博物館→まとめ

【調査活動型】（展開）

学習課題→博物館（体験・調査）→調査活動→まとめ

【学習整理型】（まとめ）

学習課題→調査活動→博物館→まとめ

【発展学習型】（発展）

学習課題→調査活動→まとめ→博物館

i i テキストの作成方針

教師の意図する授業の論理で展示を利用するためのテキストの視点について、ロンドン博物館のガイドブック等を参考にしながら解説した。

- ・事前学習用：これから見学する展示に対する興味を焦点化すると共に、一連の展示物のテーマ性を子ども達に意識させるものです。
- ・見学中用：たとえば歴史に関する展示であれば、展示されている歴史的なものから当時の状況を想像することを求めたり、それらと現在の状況との接点を発見することを求めたりすることにより、子ども達が歴史的变化の一様態として展示を見るように仕向けることが必要です。
- ・事後学習用：事前学習と見学中の学習で得た歴史的視点から見た展示物の意義を、別の素材を通して再確認させることが中心になります。

子どもたちに何を観察させ、何を理解させたいのか、また、学んだことをどのように表現させたいのかを明確にしておかなければ、博物館での学習を評価することはできない。

そこで、子どもたちが学んだことを、どのようにして表現させるかという視点で、ワークシートの提示も重要となる。ここでは、ロンドン博物館の教師用ガイドに載っている博物館の利用法を参考に、ワークシート等の作成を試みる¹⁴⁾。

「ロンドン博物館の教師用ガイドに載っている博物館の利用法について」

(以下「イギリスの博物館で」小島道裕著／歴史民俗博物館振興会(2000)から)

- ・資料を注意深く調べるために時間たっぷりとってください。
- ・子供たちが資料についてお互いに話せるようにしてください。
- ・資料を非常に注意深く見て、仮説を立てられるような質問を出してみてください。
- ・子供たちに、自分たちの答えの証拠を見つけさせるようにしてください。
- ・子供たちが、資料について自分たちなりの質問を考え、それにはどうやったら答えられるかを考えさせるようにしてください。
- ・関係する資料の似たところ違うところをさがすように、またできれば現代の同等品と比較するようにさせてください。
- ・どの資料が、それを使った人々を語るができるか、またできないかを理解できるように助けてあげてください。

ワークシートとしては、以下のような問いが示されている。

(チューダー王朝時代の展示を見学する場合)

チューダー王朝時代のロンドンには、自宅を高価な家具・壁かけ・装飾等で飾って、富を自慢していた金持ちの商人や貿易業者がたくさんいました。

あなたはロンドンの豊かな商人です。

ドイツから来た大切なお客さんに夕食会で自分がいかに金持ちであるかを自慢したいと思っています。

チューダー王朝時代のロンドン・ギャラリーを見学して、あなたの裕福さを示すために必要な次の5つのものを選んでテーブルに描いてみましょう。

- ① 飲むために使うもの
- ② 食べるために使うもの
- ③ ガラスでできたもの
- ④ 輸入品
- ⑤ 飾りのついた陶器

テーブルの上へ、選んだ物の各々を描いてみましょう。

学校に戻って、どんな食材を使った食事を訪問客に出さなければならないかを調べてみましょう。

(「お金」の展示コーナーでは)

火星諜報部員へ

我々は「人類」と称する下等な生物が生息している地球を侵略する予定だが、彼らの社会では「お金」というものが重要な意味を持っているらしい。

そこで今度の使命は、

それが

- ① どんな外観で、
 - ② 何で、どうやって作られ、
 - ③ どこで、何のために使われているか、
- を調査せよ。

また、我々はニセ金を作る必要があるから、それがどんなものかわかるように、精密な絵を書いて提出せよ。

ただし、火星諜報部員であることがバレても当方はいっさい関知しないから、自己の責任で行動せよ。

（２）２・３ 限目…博物館の教育資源についての解説（講義と見学 150 分）

2 限目は、歴史館の学芸員による博物館の教育資源について講義と館内見学を行った。

（ア）歴史館の概要について

歴史館が行っているレファレンスサービス等について、解説した。

（イ）所蔵資料についての解説

歴史館に所蔵されている史料について、図録を使いながら、解説をした。ただ、膨大な史料をなぞるのではなく、学校教育の現場で活用できそうな素材に絞った解説を行った。

（ウ）常設展示についての見学

受講者は 15 名程度のほぼ学校種ごとのグループに分かれて、常設展示を見学した。学芸員は、展示そのものの解説や、設定の意図を説明するとともに、教材としてどのような扱いが可能かといった教材開発の視点でも解説を行った。



（エ）バックヤードの見学

通常は見学することのできないバックヤードについても、グループごとに見学を行った。

遺跡発掘等の埋蔵文化収蔵する遺物収蔵庫、文書資料を保管する書庫、整理分類などを行う遺物整理室などで、それぞれの担当者から詳しい説明を聞いた。





遺物収蔵庫で、遺跡から発掘された人骨からわかる当時の生活等の説明に聞き入る受講者



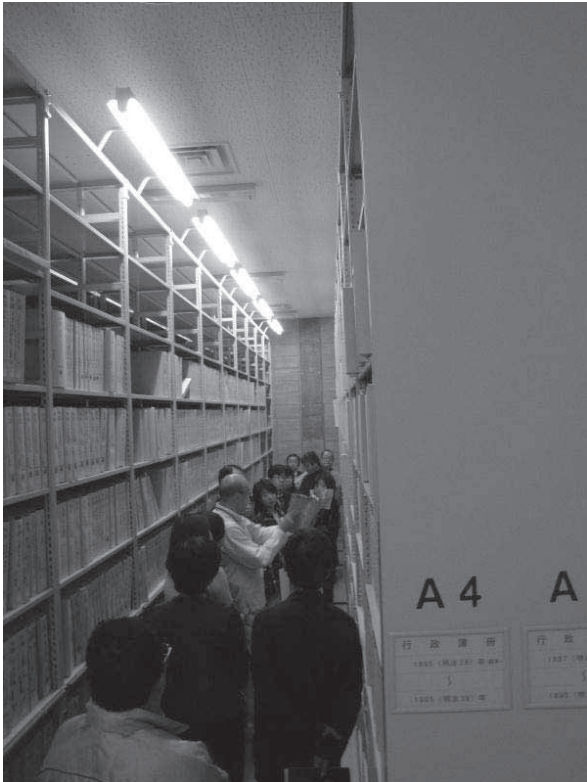
遺物整理室で、復元された土器に実際に触れて、質感や重量を体感する受講者



古文書を収蔵する書庫で、古地図などを見ながら、社会の学習などに活用する視点を学芸員から聞く受講者



古文書を収蔵する書庫で、江戸時代の庄屋の文書の説明を聞く受講者



物品を運ぶ館内の大型エレベーター
の体験をする受講者

近代の行政文書を収蔵する書庫で、明治時代の学校に関する資料について、書庫に入って、説明を聞く受講者

（３）４・５限…グループによる教材研究とワークシートづくり（１５０分）

あらかじめ学校種ごとの５～６人グループを決めておき、そのグループで何をテーマにして、教材開発とワークシートを作成するかを話し合い、それぞれのグループの目的に応じて、自由に展示見学を行ったり、図書室で調べたりさせ、ワークシートを作成した。



ワークシート作成例

[対象：高校生]

◎歴史館での学習

Mission： 各時代へワープ。夕食を作成せよ。

あなたはとある国の有名な調理師。

ある日突然、王様に呼ばれこう言われました。

「日本の長野県〇〇という場所は、良いところだといううわさじゃ。そこでかの地の、古代、中世、近世、近代の夕食が食べたいのじゃ。タイムマシンを準備しておいたから、各時代へ行って調査してきてたもれ。その時代にない食材や道具を使ったり、うその情報裏付けのない情報に基づいて作ったものは打ち首じゃ」

さあ、歴史館の異次元空間へワープし、展示品、開設の調査、学芸員さんへの聞き込み、文献の調査を駆使して夕食を完成させよう。

[条件]

季節は秋

食事の際の食器まで考えること

その時代にない調理器具、食材、調理方法は使用してはならない

試食するので、おいしいものを考えること

3～4人の小グループで調査

◎学校での事後学習

- ・ 調査結果をもとに各時代のメニューを作成し、レポートとして提出
- ・ 試作と試食会
- ・ まとめ 時代ごとの変化の確認。
 時代背景の確認。
 現代の豊かさについて考える。

ワークシート作成例

[対象：小学校 6 年生]

5000 年の時を超える！！縄文生活 1 泊 2 日計画！！

竪穴式住居の中はどのようにつくればよいのか。その秘密を探ろう。

県立歴史館で復元された縄文時代を見学しよう

竪穴式住居の中の様子

気づいたこと

縄文時代の生活について

<生活用品>

< 食 >

<ファッション>

<その他>

竪穴式住居装飾計画

<インテリア>

<フード>

<ファッション>

<その他>

住居完成予想図

こだわりのポイント

ワークシート作成例

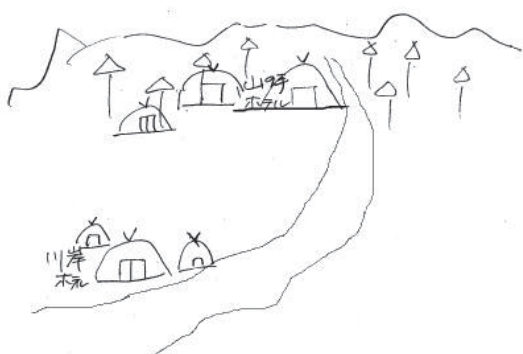
〔対象：小学校 6 年生〕

仲良し 4 人組が夏休みに尖石縄文考古館を訪ねました。学校で勉強した土器や石器を見てワクワク。そして、一番楽しみにしていた国宝の「縄文のビーナス」をじっと見つめていると…

ビーナスが「ようこそ、縄文の国へ。私といっしょに行きましょう」と話しかけてきました。気づくと 4 人は八ヶ岳のふもとの森の中にいました。

するとビーナスが、言いました。

「ホテルを二つ用意しました。お好きなほうにお泊まりください。」



選んだ理由を書きなさい

ビーナスは、言いました。

「自分たちの食事を作るのです。実りの秋、縄文メニューを参考にしてね。」

縄文メニュー

- ・やまぐり
- ・どんぐり団子
- ・イノシシ肉とゼンマイ
- ・ミツバの煮物
- ・イワナ、ヤマメのくん製

4 人でこれを作るには、どんな道具が必要だろう。

※ 常設展にヒントがいっぱい

学校にもどってから、縄文人が住んでいたのは、山の手か川岸か調べてみましょう。

ワークシート作成例

[対象：高校生]

テーマパーク『新善光寺』を創れ!

① 善光寺の人気の秘密を探れ！

評価のポイント（教師側）

- 1.誰でも参拝できる
- 2.宗派にとらわれない
- 3.全国に広める方法
- 4.善光寺信仰
- 5.みやげもの
- 6.戦国大名による取り合い

② 集客のための工夫は

- ・新しいおみやげを考えよ
八幡屋の七味唐辛子を超えるものを考えよ
- ・キャラクターを考えよ
地元キャラクターを考えよ
- ・ツアーを企画せよ
講を超える企画を考えよ

ガイド作成例

[対象：中学生]

※社会の授業や総合的な学習で、近代や地域の産業について学習した後の発展学習として

[ミッション]

当時の製糸工場の経営者として、より高い収益を継続的にあげるためには、どのような方法をとっていけばよいか

～さらなる会社の発展のためにはどうしたらよいかアイデアを出そう～

○ 提案の条件

歴史館の資料を参考に提案をすること

キーポイント

輸出のためには

品質向上のためには

労働条件は

○ プレゼンテーションでアイデアを提案発表しあう。

テーマ 縄文サバイバル～縄文時代から帰還せよ～

・古代探検ツアー～楽しんでもらっているだろうか。とつせんたが、君たちに
あやまらなくてはならない。タイムマシンのトラブルで縄文時代に落ちてしまった。
マシンがなおるまで以下のミッションをこなし無事生き残ってほしい。
仲間をいのける！

ミッション

- ① 食材を手に入れる！
- ② 調理器具、食材を手に入れる
ための道具をゲットせよ！
- ③ 調理法をさがせ！

調査報告書

① 食材

② 器具・道具

③ 調理法

生き残るためのヒント

その① ヒトは縄文時代
ブースにかくされている。

その② ヒトはあらゆる所にある。
下ばかりではなく上も見よ

その③ どうしてもわからなかったら
先住民(学芸員さん)を助け！

(これは肉です)

サバイバル生活、今晚のメニュー



メニューのこだわり

まとめ

縄文時代の食生活と現代の食生活のちがいを
わかったこと

縄文時代の食への考え方について自分の意見

現代にもとてからのミッション

- サバイバルメニュー試食
- 土器作り

ワークシート作成例

[対象：小学生]

縄文人の1日

きみは、縄文時代のある村の住人です。家族は父、母と妹の4人。きみの家族の他に8つの家族とムラをつくらせてくれています。そんなムラにタイムマシーンに乗って未来の人がやってきました。そしてきみの家族の1日の生活について教えて欲しいといいます。きみは、家族の1日の生活を紹介しなければなりません。



まず家族の仕事を調べよう！仕事は「毎日やらなければならないもの」と「たまに行う仕事」があるなあ。おとうさん、おかあさん、ぼく、妹でやる仕事もちがうぞ！（展示室、マルチメディア、閲覧室の資料を活用しよう）

縄文人の仕事

	お父さん	お母さん	ぼく	妹
毎日の仕事				
たまに行う仕事				



この表を参考にしてぼくの家族の1日のくらしを紹介する文を書くぞ！

感想（今の自分のくらしと比べてみよう）

4. 残された課題

博物館という社会教育施設を、学習活動に有機的に取り入れることの必要性を感じてもらうには有効であった。

特に、ふだん何気なく見ていた展示の見方について学んだことから、教材研究の視点をあらためて習得してもらうことができたことと、バックヤードの見学やリファレンスサービスについて体験することができたことから、教師自身も博物館に関心を持つことができ、博物館を活用した学習は、子どもたちに主体的な学びを喚起することができることを、体験的に理解することができた。

しかし、6 時間という時間設定の中で、博物館を活用した学習のあり方（概説）、教材研究の方法、実際の教材開発演習をこなすことは、物理的（時間的）にかなり厳しい面もあるので、学習計画をたてて、実際に歴史館に来た時のワークシート（ガイド）づくりを行ったが、学習計画を作成するコース、博物館の素材を活用したテキストを作成するコース、見学時のワークシートを作成するコースというように、内容を絞り込んで演習を行うことも、一つの方策と考える。

講座では、多様な学校種の先生方が受講されたので、グループ分けをすべての内容で学校種ごとにしたが、学校種ごとに分けたことのメリットとデメリットについては検証できなかった。ワークシートやガイドの作成の演習段階では、校種ごとにグループが構成されていることから、教師同士の話し合いの内容等をみていると、校種が同じということで、子どもの実態がイメージしやすいという印象であった。

なお、演習では当初、博物館がもつ資源について、教師の関心で、ワークシートを作成するということに意識が集中してしまったため、漠然としたワークシートになってしまったグループもいくつか見られた。

そこで、子どもの学習を評価するためのワークシートやガイドであるということを強調し意識化させたことで、ワークシートの作成も、何を子どもたちに表現させたいのかが明確になった。

ロンドン博物館のワークシートの例を取り上げたが、これまでの受講者の教育実践とは発想がかけ離れていたようで、受講者は消化不良のまま演習に入ってしまったという状況が見られたが、評価の観点という意識化を図ったことで、シートの作成が具体化することができた。


[註]

- 1)①一場郁夫「歴博ブックレット 10 歴史発見！歴博活用アイデア」（財）歴史民俗博物館振興会，1999 年、②加藤公明「歴博ブックレット 13 子どもの探究心をはぐくむ博物館学習」（財）歴史民俗博物館振興会，2000 年、③小島道裕「歴博ブックレット 16 イギリスの博物館で一博物館教育の現場から」（財）歴史民俗博物館振興会，2000 年、④「博物館を活用した授業」教室の窓「小学校社会 Vol.3」東京書籍，2005 年、⑤松永博司「博物館や地域の史跡を活用した考える歴史学習の展開ー堀内貝塚から縄文時代を探ろうー（東書 E ネット指導資料）」東京書籍，2010 年などがある。
- 2)「文部科学省社会教育調査 平成 20 年度概要」より
- 3)国立歴史民俗博物館や川越市立博物館、鉄道博物館等における学校教育関係者との連携による見学プログラムや指導のためのガイドブックの作成や神奈川県立総合教育センターの横浜市内の博物館との連携による教材開発等が試みられている。
- 4)日本博物館協会「日本の博物館総合調査研究報告書」2009 年
- 5)伊藤寿朗「市民のなかの博物館」吉川弘文館，1993 年，P152
- 6)国立科学博物館による「大学における小学校教員養成課程学生に対する科学的素養を向上させるための外部の教育資源を効果的に活用する教育方法に関する調査研究」（2009 年）、「小・中学校と博物館の連携に関するアンケート調査報告」（2009 年）、「持続可能な社会のための科学教育を具現化する教師教育プログラムの開発」（2011 年）、「小学校教員をめざす文系学生のための理科講座」（2011 年）や、国立歴史民俗博物館による「国立民族学博物館を活用した異文化理解教育のプログラム開発」（2005 年）など
- 7)1988 年に東京ステーションギャラリーで開催された「キュビズムってなんだろう？」で使用されたセルフガイドは「キュビズム」における形態の捉え方の過程を、質問とイラストを通して理解できるように作られていたことから、その後多くの博物館・美術館で作成されるようになった（寺島洋子編「博物館教育論」放送大学教育振興会，2012 年 P69）。
- 8)棚橋健治「博物館の利用」『社会科系教科における現職教員の授業力向上プログラム作成のための研究報告書』国立教育政策研究所，2009 年，pp191-193
- 9)前掲書 4
- 10)寺島洋子編「博物館教育論」放送大学教育振興会，2012 年，pp133-143、可児光夫「美濃加茂市民ミュージアムの博学連携活動ー子どもの学びと地域博物館ー」瑞浪市立化石博物館報告 No35，2009 年，pp63-72 などによる。
- 11) 前掲書 1) ー①， pp37-38
- 12) 前掲書 1) ー①， pp40-44
- 13) 前掲書 8
- 14) 前掲書 1) ー③， pp22-29

1 博物館の教育力

○博物館の特徴・利点

- ・ **Real Object**
“さわる”
“嗅ぐ”
“感じる”
具体から抽象への教育
- ・ **Constructivist 育成**
子どもが既に持っている
知識を組み立てる力の育成
- ・ **Different ways of learning**
学校では得づらい多様な教育方法満載の場




博物館のもつ教育機能

- 展示見学
- バックヤードツアーへの参加
- 講演会や勉強会への参加
- 博物館発行の出版物からの情報収集


↓

- ・ 展示に込められた対象事象の理解の構造
(展示の内容や順序=カリキュラム・授業構成)
- ・ 博物館のもつ研究機能の授業への導入
(学芸員はどのようにその事象を研究したか)
- ・ 博物館企画の学習活動と、学習内容との関係
- ・ 博物館利用による教師自身のスキルアップ



博物館における教育活動と問題点


- ・ 見学すれば勉強になる
→授業内容との連携が不十分
- ・ 現物を見たり、触れたりすることに意義がある
→学習が社会認識に位置づかない
- ・ 学芸員におまかせ
- ・ 展示資料のみが博物館の活動?



歴史館の論理と教育機能を意識する

博物館の論理に基づく社会認識分析をしてみると

1. 何が展示されているか
2. どのような順序、
配置で展示されているか
3. 展示物にはどのような解説が
附されているか
4. 用意されているパンフレット等に
何が書かれているか





もう一步踏み込んで 歴史館展示を見る際のポイント

1. 時間の意識
時間的前後関係や歴史的重みを考えてみましょう。
2. 変遷の意識
歴史的事象の成立→発展→崩壊という移り変わりについて考えてみましょう。
3. 因果の意識
事象と事象との間に存在する原因と結果(因果関係)について考えてみましょう。
4. 未来を意識
歴史的事実から未来の人間の生き方について考えてみましょう。

- ①展示室の概要をつかみ展示場所に行き、展示資料を見る。
- ②展示資料の名前を知る。
- ③展示資料がつくられた年代を知る。
- ④展示資料に関する解説を読む。
- ⑤展示資料をよく観察する。
- ⑥近くに置いてある関係のありそうなものを見る。

見方

- ①何に使ったのか考える。
- ②どのように使ったのか考える。
- ③誰が（どんな人が）つくったのか考える。
- ④何のためにつくったのか考える。
- ⑤人間のくらしに与えた影響と
人間の知恵について考える。
- ⑥今の時代からの時間的経過を考える。
- ⑦同じ時代とのつながりを考える。
- ⑧他の時代への移り変わりを考える。
- ⑨当時の人間のくらしの様子を想起する。
- ⑩現在の人間のくらしと対比し、未来の人間の
生き方について考える。



授業の論理で、歴史館の利用を見ると

【課題発見型】（導入）

博物館→学習課題→調査活動→まとめ

【問題解決型】（展開）

学習課題→調査活動→博物館→まとめ

【調査活動型】（展開）

学習課題→博物館（体験・調査）→調査活動→まとめ

【学習整理型】（まとめ）

学習課題→調査活動→博物館→まとめ

【発展学習型】（発展）

学習課題→調査活動→まとめ→博物館

授業の論理で博物館を利用するためのテキストを作成しよう

来館前の学習のためのテキスト

博物館における学習のためのテキスト

見学終了後の学習のためのテキスト

GUIDELINES

For Teachers and Group Leaders

WORKING WITH CHILDREN

- Give them plenty of time to explore objects carefully.
- Give them to talk about the objects using different words.
- Ask questions that will help them to look at the objects in a different way and to think about them.
- Encourage them to suggest and discuss different uses for the objects.
- Encourage them to talk about the objects and to think about them in a different way.
- Look for similarities and differences between objects and to think about them in a different way.
- Why does it matter what objects are used for? How can we use them in a different way?

- ・資料を注意深く調べるために時間たっぷりとってください。
- ・子供たちが資料についてお互いに話せるようにしてください。
- ・資料を非常に注意深く見て、仮説を立てられるような質問を出してみてください。
- ・子供たちに、自分たちの答えの証拠を見つけさせるようにしてください。
- ・子供たちが、資料について自分たちなりの質問を考え、それにはどうしたら答えられるかを考えさせるようにしてください。
- ・関係する資料の似たところ違うところをさがすように、またできれば現代の同等品と比較するようにさせてください。
- ・どの資料が、それを使った人々を語るることができるか、またできないかを理解できるように助けてあげてください。

「イギリスの博物館で」小島道裕（国立歴史民俗博物館振興会）2000年

TUDOR LONDON

Living like Tudors

There were many rich merchants and bankers living in Tudor London who enjoyed showing off their wealth of money, with expensive furniture, and expensive and ornate clothes. Imagine you are an rich London merchant who is looking to decorate his new house with a few Tudor items. Look around the Tudor London gallery. Choose five objects that you would display in your own home that would show how rich you were.

You need:

- something to drink from
- something to eat out of
- something made of glass
- something from outside
- some decorative object

Draw each of the objects that you choose into the table in the picture. Back in school, look at what kind of food you might have chosen to feed your visitors.

チューダー王朝時代のロンドンには、自宅を高価な家具・壁かけ・装飾等で飾って、富を自慢していた金持ちの商人や貿易業者がたくさんいました。

あなたはロンドンの豊かな商人です。ドイツから来た大切なお客さんに夕食会で自分がいかに金持ちであるかを自慢したいと思っています。

チューダー王朝時代のロンドン・ギャラリーを見学して、あなたの富裕さを示すために必要な次の5つのものを選んでテーブルに描いてみましょう。

- ①飲むために使うもの
- ②食べるために使うもの
- ③ガラスでできたもの
- ④輸入品
- ⑤飾りのついた陶器

テーブルの上へ、選んだ物の各々を描いてみましょう。

学校に戻って、どんな食材を使った食事を訪問客に出さなければならないかを調べてみましょう。

火星課報部員へ

我々は「人類」と称する下等な生物が生息している地球を侵略する予定だが、彼らの社会では「お金」というものが重要な意味を持っているらしい。

そこで今度の使命は、

それが

- ①どんな外観で、
 - ②何で、どうやって作られ、
 - ③どこで、何のために使われているか、
- を調査せよ。

また、我々は二セ金を作る必要があるから、それがどんなものかわかるように、精密な絵を書いて提出せよ。ただし、火星課報部員であることがバレても当方はいっさい関知しないから、自己の責任で行動せよ。

[研修受講者に配布した館内見学時のワークシート]

館展示見学のためのテキストを作ろう

受講者番号：

氏名：

展示見学を導入する单元名：

1 展示内容を見学順路にしたがって列挙する。

2 順路にしたがってそれらの展示を見学した場合，子どもはその事象に対して，どのような認識を形成すると想定されるか。形成される知識を構造化する。また，その展示から子どもが受ける印象を想定する。

3 授業では，この展示が扱っている事象について，子どもにどのような認識を形成すると想定するか。形成される知識を構造化する。また，その授業から子どもが受ける印象を想定する。

4 来館前の学習活動のためのテキストを考案する。

a．歴史館の展示を見学する際に子ども達が持つべき問題意識は何か。

b．それらの問題意識を持つためには，展示の何に注目させることが必要か。

c．そこに注目させるためには，子どもにどのような問いかけをしたらよいか。展示はそれにどのように応えるか。あるいは子どもにどのような活動をさせたらよいか。

5 歴史館における学習活動のためのテキストを考案する。

a. 訪問前に明確化した問題意識に応えるには、展示の何に注目させるべきか。子どもがそれに気づくような問いかけはどうしたらよいか。

b. 展示からわかったことを記録させるためのワークシートを作成する。ワークシートには何を、どのように、いつ記入させるか。

6 見学終了後の学習活動のためのテキストを考案する。

見学前と見学中の学習で得た展示物の意義を確認するために提供すべき別の素材は何か。

7 このテキストを使用して歴史館を訪問する場合と、使用しないで訪問する場合では、その単元における子どもの理解や態度形成にどのような相違があるか考察する。

歴史館まなび隊

1

縄文のムラ

ここでは、いまから約6000年前の縄文前期、八ヶ岳のふもとにあったムラのようなものを再現しています。森を丸く切り開いて、立石・列石（りっせき・れっせき＝実物の60%の大きさです。実際は2倍くらいの大きさと考えてください。）を中心に平地式・竪穴式（たてあなじゅうきょ）や床を高くした建物（実物の70%大）、集石（実物の60%大）など配した風景が広がっています。

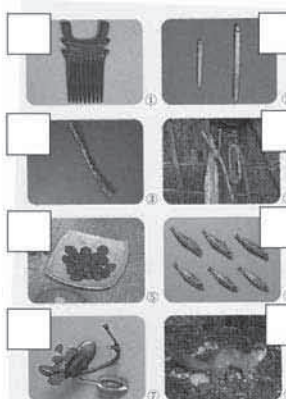
背景の八ヶ岳の山頂部はすでに新雪が積もり、その下は緑の針葉樹（しんようじゅ）、さらに下ると紅葉した広葉樹（こうようじゅ）を見ることが出来ます。収穫の秋、縄文人が集まって秋の盛大な祭りが終わって、しばらくした静かな秋の夕暮れです。

当時の人びとは、地面を掘りくぼめて床をつくり、床に穴を掘って柱を立て、その上の屋根をカヤなどの植物を材料に葺（ふ）いた竪穴式住居で暮らしていました。展示室の竪穴式住居は、諏訪郡原村阿久（あきゅう）遺跡の発掘調査をもとに復元したもので、家の柱などの建築材にはタリ、ミズナラなどの広葉樹が使われています。

この家の家族は夫婦と小さい子ども二人の四人です。父親と息子は八ヶ岳（やがたけ）の山麓（さんろく）にシカ猟（りょう）にでかけました。たぶん仕とめたシカをかついで家路を急いでいるのでしょう。母親と娘も近くの小川に洗った物と水汲みに出かけているので、今の家は留守なのです。



竪穴式住居の内



ここにあった！
□をチェック！！

ほかにもいろいろあるから、お気に入りを見つけてみよう。

豊かな山の幸

約6000年前の縄文時代前期には、現在と同じような樹木が育っていました。東日本でどんぐりやヤマクリなど、実をつける木々の森（落葉広葉樹林 らくようこうようじゅりん）が広がっていました。

木の実やきのこ、ヤマノイモなど植物の食料採取を中心として、秋にはサケ漁、冬には鳥や獣（けもの）の狩猟などをして暮らしていました。

竪穴式住居の内には、クマ、シカ、カモシカの毛皮が敷かれています。炉の中には火にかけた土器の中でやまぐりやゆでられています。夕食の準備をしているのでしよう。炉の脇の浅い鉢にはどんぐり団子にイノシシの肉やゼンマイ・ミツバなどの煮物（にもの）が盛り込まれています。

炉のまわりには、どんぐりなどを割る台石とたたき石、それらを粉にする石皿とすり石などがあります。炉の土の火櫃（ひだな）にはへびの干物（ひもの）もあります。

柱周辺には、狩に使う弓と矢、シカの角で作った釣り針、天蓋（てんさん）の糸から造った釣り糸のついた釣竿（つりざお）、木を切るときに使う磨製石斧（ませいせきぶ）、家の修繕などに使うアジ、アケビ、ヤマブドウのつるやそれらで造られた籠（かご）などの日常生活の道具があります。

屋根を支える梁（はり）にはノウサギやキジがつるがされています。さまざまな食料や道具から、縄文人の豊かな生活を実感できます。

探してみよう12

左の写真①～⑩は室内にある道具のほかに、住居のまわりで見つけることができる動物や木の実です。どこにあるのか探してみませんか。

写真の名称（①から順に）

①うるし塗りのくし ②ヘアピン ③柄（つか）に打製石斧（土器具）

歴史館まなび隊

4

片倉組（日本を代表する製糸会社）事務所の外観



片倉組の煉瓦造について

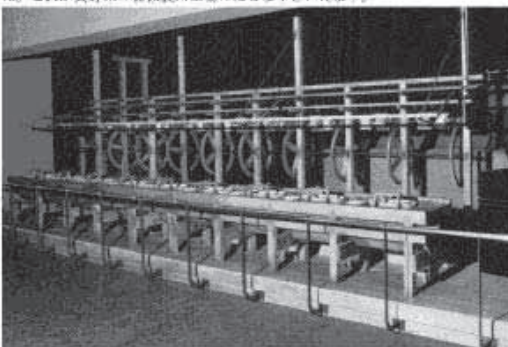
この建物は煉瓦造に見えますが、実は木筋煉瓦造です。外壁にこのころ流行していた箱型をかけた煉瓦を張ったものです。軸梁をかけた煉瓦は強度も強く、雨や凍結にも強いものでした。冬の寒さの厳しい谷間の風土にあっています。

1878（明治 11）年、後に片倉製糸紡績株式会社のものになる山梨製糸場が、諏訪郡川岸村（河谷村）に片倉兼太郎によって造られました。兼太郎は工場数を増やし、1890（明治 23）年には松本にも製糸場をつくりました。1894（明治 27）年には片倉組というグループに発展しました。

歴史館の常設展示室では片倉組の事務所一階の外観を原寸大で復元しました。みなさんが見ているのは、玄関の反対側です。この建物は、1910（明治 43）年に建てられています。石柱と煉瓦の壁を組み合わせたこげ茶色の外観が当時のモダンなおもむきを伝えています。現在も中央印刷株式会社の事務所として使われ、国の登録有形文化財になっています。

埴科郡西条村六工製糸場（日本初のフランス式民営製糸場）

ここは、1874（明治 6）年、埴科郡西条村六工（長野市松代町）にできた六工社という製糸工場の復元です。そのころの日本は、生糸が重要な輸出品でした。明治政府は日本を豊かにするために製糸業に力を入れました。六工製糸場は群馬県にあった官営富岡製糸場をモデルにつくられました。フランスの製糸工場技術を取り入れました。民営では日本で初めての導入です。一度に50人が雇って作業ができることから「フランス式50人繰り」の製糸工場と呼ばれました。これが長野県の機械製糸工場のはじまりといえます。



工場の蒸気釜は地元の松代産きの釜が使われています。考案者は海防副太郎です。当時、地元にはボイラーはもちろん蒸気釜や釜の釜、蒸気をとるパイプなどをつくる技術がなかったため、蒸気釜をくり出すことはたいへんな苦勞をしました。釜を二つに切った形を考案、針金を蒸気のとる管に見立ててミニチュアのモデルをつくり、蒸気釜をつくりあげたといわれています。松代産きの釜は湯みに強く、使いやすい利点がありました。

糸繰り器の下を見てください。ペダルがついています。何のためにつけているのでしょうか？みんなで話し合ってみましょう。